

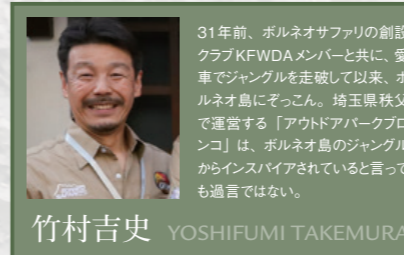


THE 30TH BORNEO SAFARI INTERNATIONAL OFF-ROAD CHALLENGE 2022
第30回ボルネオサファリ インターナショナル オフロード チャレンジ 2022

ボルネオの苦しみを克服し 仲間達と喜びを分かち合う

世界最大級の本格オフロードイベント同行記

文/竹村吉史 写真/竹村吉史・卜部敏治 協力/SFWDA



竹村吉史 YOSHIFUMI TAKEMURA

31年前、ボルネオサファリの創設クラブKFWDAメンバーと共に、愛車でジャングルを走破して以来、ボルネオ島にぞっこん。埼玉県秩父で運営する「アウトドアパークブロンコ」は、ボルネオ島のジャングルからインスパイアされていると言っても過言ではない。



400台ものコンボイのため、ルートでUターンとなる道路が4x4で大渋滞する。しかし陽気なサバガイ達は、楽しそうに手を上げてすれ違うのだ。



ボルネオ島北部のサバ州で開催されるボルネオサファリ。第30回大会は霊峰キナバル山西部の山麓に残るオールドティンバロードを走破するルートが設定された。

スコールの影響は思いの外大きく タグオングループは完全に足止め

初日はアンハッピーな流れを予感させる1日だったが、夜半からターブを激しく叩くスコールの雨音で寝不足気味に目が覚めた2日目は、厚い雲が広がるものの雨は上がり気持ちの良い朝だった。しかし周辺の川は水位が上がり、スタート前のミーティングで聞いた「10ミリを超える雨が降ると、ハードコアルートは超ハードになる」との言葉が頭をよぎる。

実は先日、我々はタグオンAチームとしてスタートしたが、今年からタグオンチームはレースを観戦しないコンボイツーリングになると聞き、急遽本来のインターナショナルメディアチームのコンボイに戻っている。このチームはオフィシャルの中核組織でもあるため、レースの進行が大きく遅れるとハードコアルートに入れない可能性もある。レースは取材したいハードコアも走りたい、そんなわがままな選択をしたのだから仕方がない、あとは神に祈るばかりとなった。

シュラフとコットをしまい、皆で大型ター

ブを片付けていよいよ2日目のスタートだ。ガソリンを異様に飲み込む極悪燃費と電装系のトラブルを抱えた我々のJB31も、クルマの発する音や振動、臭いを敏感に感じながらスタートする。今日の移動は距離も短くほとんど舗装路だったため、無事にトルンガンのSS会場兼キャンプ地にたどり着くことができた。

セクションとなった川の水位は高かったがSSは順調に消化され、残すはナイトSSだけとなった。しかし夜半から激しいスコールに見舞われ、水位が下がるのを待つことになった。

結局我々はバンブーハウスのトタン屋根をリズムカルに叩く音を聞きながら、3日目の朝を迎えた。すぐ横を流れる川は濁流と化し、午後には雨脚が弱まったものの水位は下らず、終日トタンを叩く雨音と共に過ごすことになった。そんな中、タグオン6チームがハードコアルートに進入するも、先行の3チームが集団でスタックして身動きがとれず、残る3チームがハードコアルート手前で待機しているとのニュースが飛び込んできた。



2日目は河原でのSSだったが、前日からの雨で水位が上がり、深みに入ってしまうマシンもいた。観戦者は楽しいが、チームスタッフには辛いコンディションだった。



ターブを叩く雨音と高湿なキャンプサイトだが、ターブの下にはカラオケなどジャングルタイムを楽しむ人々がいた。自然や気象に逆らわないのが、ジャングルの掟だ。





①キャンプ地には地元民による屋台が設置され、小倉君もライスと総菜を葉っぱに包んだ郷土料理を購入したが、かなり酸っぱかったようだ。②今回小倉君がレンタルしたJB31の前で記念撮影。③キャンプ地では夕方になるとマンディと呼ばれる行水で川が賑わう。小倉君も2日目にドキドキしながら入水し、その気持ちよさを知った。④蚊を媒介とするマラリアの汚染地区もあるため、予防薬の準備が欠かせない。

4日間降り続けた雨がやっと上がり いよいよハードコアにスタートだ

4日目の朝には雨が上がり、4,095mの高さを誇る霊峰キナバル山が顔を出していた。朝からオフィシャルが忙しく動き回っていると思ったら、川の水位が下がらないため、ここでのSSをキャンセルし、次のステージに移動するという。慌てて辛いマギーのカップヌードルとコーヒーで朝食を済ませ、スタート準備を整える。

SS会場に向かう途中、ちょっと早すぎる昼食休憩となったため、異臭を放つ寸前の濡れた衣類を日干しした。ジャングル生活も案外忙しいのだ。今日のSS会場は椰子油のプランター横に設定されたガレ場や崖を上り下りするセクションで、大きなトラブルも無くSSは順調に消化された。この後、ナイトSSと翌朝のSSがうまく進めば、待望のハードコアルートに向かえると

あって、メディアチームの面々も期待を膨らませているのが分かる。コンペティショングループは椰子油プランター内でキャンプとなったが、我々には少し離れたテングルスのキャンプ場が用意された。振り返ってみると、初日以外は屋根の下で寝ているため、ボルネオサファリを俯瞰で見ているような感じなのだ。ボルネオサファリはやっぱり泥たのままコットに寝るのが「らしい」のだろうなあ。陽も傾き、行水好きになった小倉君は、キャンプサイト脇の川に入る気満々だったが、水深が深いため禁止されておりちょっと寂しかった。

翌5日目の朝は、久々にボルネオらしい太陽が昇り、小鳥たちの清々しいさえずりで目が覚める。昨夜のナイトSSで泥になったパンツのままSS会場に向かい、SSのスタートを待っていると、突然ハードコアに向かうからクルマに戻れとエクスベ

ディションリーダーのアンソニー氏から連絡が入る。高ぶる気持ちを抑えつつコンボイについて行くと、村の集会所で全車停止。ここではボルネオサファリのメディカルスタッフが無料で村の人々を診療していた。ボルネオサファリが持つもうひとつの側面が、このような過疎地でのボランティアやチャリティ、そして災害復興支援などの活動なのだ。



各コンボイには、サバ州立大病院やクイーンエリザベス病院に籍を置く医師や看護師などが帯同している。画像では女医さんがトゲを抜いているだけなのでご安心を。



前後左右、樹木しか見えないジャングルをひたすら進む。時折ジャングルジャムが発生するが、メンバーはお茶を飲むなどジャングルでの時間を楽しんでいる。

もっとジャングルを走りたくなる それがボルネオサファリの魅力だ

医療ボランティアを終えたメディカルスタッフを乗せると、コンボイは藪の中に進んでいく。小さな小川を渡ったところでコンボイが停滞し、前方の車両からメンバーたちが降り始めた。このようなジャングルジャム（渋滞）は、前方でクルマがスタックすると発生するのだが、停車時間が長すぎるので歩いて偵察に行くことにした。

先頭は開拓を担うスカウトチームで、チェーンソーやマチェットでルートを開いている最中。私もクルマに戻り、先日金物屋で仕入れたマチェットを使って伐採を手伝うことにした。難所が切り開かれると、徐々にコンボイは動き始めた。終日深いジャングルを走り、日没後にコンボイが停止。周辺の草木を刈り取り、即席のキャンプサイトが完成すると、ション夫妻による野外ディナーパーティーが始まった。マチェットを振り回した身体はクタクタで、

瞬く間に夢の中に落ちていた。

6日目は太陽から降り注ぐ直射日光が痛いほど暑く、エアコンの効きが悪いJB31は窓を開けていた方が涼しく感じる。朝から深いジャングルを走り続け、昼過ぎに開けた丘陵地にたどり着いた。格別な爽快感を味わった直後、突然幅の広いモーグル状のダウンヒルが現れ、リアにアンカーを取った方が良いと言われたが、ここは日本人の意地で単独落下することにした。後にこのような止まらないダウンヒルはバンジーキャンプと名付けられたようだ。その後も渡河、ステアケース、マッドヒルクライムが続き、ナイトラン、ウインチングまでというフルコースとなり、その夜は二人ともいい年こいて泥のように眠る事ができた。翌日にはハードコアセクションを抜け、8日目の午後にはサバ州の州都コタキナバルに帰還。8日間の旅を共にしたJB31は、最後までバッテリー上がりなど、我々を楽しませてくれたことを付け加えておこう。



⑤ハードコアルートは、長年の放置で道が樹木で塞がれているため、皆で道を切り開きながらコンボイを前進させる。⑥バンジージャンプと名付けられたスリッピなダウンヒルは、幅が広く車体が横を向くと横転間違いなし。⑦マッドなハードコアだったが、我々のジムニーは「スーパージムニー」と呼ばれ、走破性の高さをメンバー達に見せつけた。⑧日没後もスタックに次ぐスタックでキャンプ地にはなかなか辿り着けない。



なかなか晴れ間が出なかったため、休憩時間を利用して川で洗濯した生乾きの衣類を干す。



ジャングル内でも、驚くようなおいしい食事を提供してくれたション夫妻。感謝しかない。



ボルネオサファリでは、コンボイ移動中に過疎地の村に立ち寄り、メディカルチームによるボランティア活動も行っている。



ルート横に即席で作られたキャンプサイト。足下はぐちゃぐちゃで湿度も高い場所だったが、初日に「不快でたまらぬ」と言っていた小倉君も楽しそうに過ごしている。



ジャングルから抜けたとたん、気持ちの良い草原が現れ、もはやゴールしたかのようにご機嫌な小倉君。この時点では、この先にある荒れたハードコアを知る由も無い。



ボルネオサファリ8日目の夜に開催されるクロージングディナーは、1,200人を超える参加者が大集結する壮大なパーティー。表彰式も兼ねており、深夜まで続く。